

## 《論 文》

# 中国語の色彩語彙と象徴

古 田 朱 美, 立 松 昇 一

## 1. はじめに

私たちは、ことばとイメージという観点から、いくつかの項目について、日中双方の立場から考察していこうと考えた。その対象項目のいくつかを挙げてみよう。色彩、動物、植物、身振り、ことわざ、衣装、風景など。これでは対象があまりにも漠然として広いので、今回は日中双方の立場というより、まず、中国に焦点を合わせ、中国語における色彩語彙と象徴について触れていくことにした。

最初に日本人の立場から色彩について、いくつか印象的なことを挙げておきたい。

中国ではもはやあの人民服を脱ぎ捨て、スカートやジーンズを穿いている。あの当時(文革期)は緑、濃紺の人民服が印象的であった。今は影も薄い。文革時代には「紅色娘子軍」という映画があった。こうしょく?と一瞬の喜びも女性たちのすさまじい戦闘の姿に圧倒されてしまった。北京の香山は「紅葉」の名所だが、そこにある瑠璃塔の鮮やかさは筆舌に尽しがたい。また紫禁城の古色蒼然とした色どりは古都の名にふさわしい。

さて、日常の光景に目を転じてみよう。中国ではポストがなんと緑色、郵便屋さんは緑の自転車やバイクに緑の制服。ある時、商店で練り歯磨を買おうとしたら、「黒妹牌」と書いてある。包装も黒のイメージで歯磨のチューブの色も黒っぽく、何か靴ずみみたいで、これで歯が白くなるかと、ちょっと惑い、別のを選んでしまった経験がある。インクの青も日本のものと微妙に違う。これは材料が違うからだろうか。

材料といえば、中国の仏像に塗られているけばけばした色彩を目になると日本の仏像に見られる色彩との異和感を感じる。これは技術的なものなのか、それとも材料のせいなのか、民族的好む色彩なのか。

映画での色彩についていうと、張芸謀監督の映画「紅高粱」、「大紅燈籠高高掛」(紅夢)は「紅」のイメージが鮮烈に迫ってくる。文芸作品でも例えば魯迅作品の「白」のイメージ(『白光』など)、郁達夫作品の「淡い色彩」(『街灯』、『薄奠』など)は特独のものがある。

さて、以下に中国語を中心にその歴史的背景、色彩語彙の象徴的な意味合いについて考えていこうとする。

## 2. 色彩語彙と思惟

中国料理は、色どりが豊かで、人を楽しませ、おいしさを増す。洋の東西を問わず、料理から色を取り去ったなら、または白と黒しかなかつたならば、さぞかし食欲をそそらぬものとなるだろう。色彩は人の感情や欲求にも深くかかわっている。部屋の中のカーテンや壁紙の色を変えてみると気分が一新する。人々がはなやかな色の服装で参加するパーティーはそれだけでも楽しい雰囲気になるし、黒(日本の場合。中国は白)一色の喪服は人々の悲しみをさそう。青空の下の緑一面の野原は人々の心をのびやかにする。このような色が与える感情は個人によってもほとんど変わらないし、世界的にも共通している点も多い。世界的な比較についていえば、日本は欧米と比べると、赤・青・緑を好む点では共通しているが、白を好む点が欧米とは異なる

っている。白に対する好みの傾向は日本だけではなく、韓国や台湾でも認められるという。

このような地域差や文化差が生じるのは、もちろん色覚器官の差異によるものではない。いかなる感情やイメージを好むのかについては、風土や文化や習慣による影響が大であることは今更申すまでもない。

中国人は古来より、色彩語で自らの思いを表わし、感情を述べるのを好む傾向にある。これは中国の伝統的な文化と密接に結びついている。中国の伝統的な思惟方法の中で、「直観による思惟」は基本なもの一つである。<sup>1)</sup>色彩語を含む中国語をみてみると、そのほとんどが事物の表象や特性によって一つの概念を表わしている。例えば、「唇紅歯白」或は「朱唇皓歯」は人の容貌の美しさを形容したことばであるし、「碧水青山」は、青々とした生気に満ちた美しい山河をたとえたことばである。唇や歯の色、山や川の景観をくりかえし目にすることによって、それが経験化され、知識となる。そこにまた伝統的な色彩観も加わり、心の内部に美意識が生まれ、容貌の美しさや山河の美しさはこうだというひらめき、直観によって、上にあげたいくつかのことばが生まれたのである。

このように経験によって、事物を直観的に、直観的に、ひらめきによってとらえる思惟方法は、中国の成語や詩詞、文章、哲学理論或は生活の中で幅広く使われており、直観によって大自然の「万紫千紅」(さまざま)事物を観察し、それによってさまざまな思いや感情を表わしてきた。中国語の中の色彩語彙の豊富さや、種類の多さは、まさにこの思惟方法によっているのである。

### 3. 中国の色彩語彙の由来

中国の伝統的な観念は、殷周時代にすでに、陰陽五行説と五色が配当されていることによってうかがい知ることができる。「五色」とは、「黒、白、赤、青、黄」の五つである。長い間の封建的な社会の中で、色を尊ぶ考え方が確立し、五徳(温・良・恭・儉・讓)に五色を配したり、異

なった色の服装で異なった地位、階級を区別してきた。

陰陽五行説では、一切の自然現象と人間の活動を五種類の物質元素(水・火・木・金・土)に還元し、万物のすべての変化は陰陽二つの対立、互いの力の相互作用によって引き起こされるとしている。『礼記・礼運』に「五色六章十二衣、めぐらしつあい還相為質」(五色・六章・十二衣、還りて質を相なす)とある。孔穎達の疏に「五色は青、赤、黄、白、黒を謂い、五方に據る」とある。後漢の許慎の『説文解字』に「青は東方なり。赤は南方なり。白は西方なり。黄は土の色なり」とある。黒には釈文はないが、<sup>(2)</sup>段玉裁の補によると、「北方の色なり」とある。五行説では自然現象、例えば、春夏秋冬についても、春は木(東)、青、夏は火(南)、赤(朱)、秋は金(西)、白、冬は水(北)、黒というように五色をそれぞれ配している。従って、『青春』とか『朱夏』とか『白商』、<sup>(3)</sup>『玄冬』といったことばができたのである。(表A参照)

東	春	青	木
南	夏	朱(赤)	火
中央		黄	土
西	秋	白	金
北	冬	玄(黒)	水

(表A)

しかしながら、この五色は、伝統的な観念によって、人々の間で習慣化され、規範化されて、語彙の中に定着していくわけであるが、五色はいわば五行思想の中から演繹された人為的な色彩体系であるともいえる。中国のより古い色彩語彙を知ろうと思うならば、まず金文や甲骨文の中から探しなければならない。金文についての資料は遠藤雅裕氏の研究<sup>4)</sup>があるのでそれを借用させていただく。(表B参照)

表Bは『殷周青銅器銘文選(馬承源主編、988年、文物出版社)』の中から選び出された色彩語彙である。遠藤氏の統計によると、青銅器を形容した色彩語彙は合計で83語あるという。その主な語彙は「玄」、「白」、「赤」、「朱」、「彤」、「黄」、

適用対象	玄	幽	白	赤	朱	形	黃	葱
馬	0	0	3	0	0	0	0	0
金	0	0	1	4	0	0	0	0
鏐	4	0	0	0	0	0	0	0
黃	0	4	0	0	14	0	0	2
亢	0	3	0	0	1	0	0	0
虎 (琥)	0	0	0	1	0	0	0	0
衣	18	0	0	0	0	0	0	0
袞／袞衣	5	0	0	1	0	0	0	0
市	0	0	0	26	2	0	0	0
○ (雍) 市	0	0	0	7	0	0	0	0
旂	0	0	0	1	2	0	0	0
鳥	0	0	0	12	0	0	0	0
沙	0	0	0	0	0	7	0	0
虢 (鄕)	0	0	0	0	6	0	0	0
耇	0	0	0	0	0	0	6	0
その他	3	2	1	3	5	0	5	0
合計	30	9	5	55	30	7	11	2

(表B 金文の色彩語彙)

「葱」などである。(表B中の鏐は上等の黄金のことであり、亢は玉石、袞衣は古代天子の礼服である。)

表Bによると、赤色の例が最も多い。この点は『礼記・檀弓』に「夏后氏は黒を尚び、殷人は白を尚び、周人は赤を尚んだ」とあることから、周人が特に「赤」を尊んだことがわかる。

『爾雅・释器』に「黒これを黝といふ」、『礼記・玉藻』に「一命縕骫幽衡，再命赤骫幽衡」(一命の士は縕骫幽衡、再命の士は赤骫幽衡)とあり、鄭玄注にいう「幽は黝と読み、黒はこれを黝といふ」などの記載によって、「幽」と「黝」は同じであることが証明できる。また『爾雅・释器』に「青これを葱といふ」とある。以上によって、金文の中で最も古くて常用されていた色彩語彙は「赤」「朱」「玄」「黄」「幽」「形」「白」「葱」と推定できる。

更に甲骨文の資料の中から中国の最も古い色彩語彙をみてみると、これも遠藤氏の統計を借用して示すと、表Cのようになる。

表Cの中の色彩語彙は、ほとんどが祭祀のた

動物名	黒	幽	白	赤	黄	戩
牛	4	10	15	0	2	10
羊	4	0	4	0	0	0
馬	0	0	5	3	0	0
豕	1	0	14	0	0	0
犬	1	0	3	0	0	0
狐	0	0	3	0	0	0
彘	0	0	5	0	0	0
豕	0	0	2	0	0	0
猴	0	0	5	0	0	0
𤧔	0	0	1	0	0	0
豚	0	0	2	0	0	0
兜	0	0	1	0	0	0
鹿	0	0	2	0	0	0
牡	0	0	3	0	0	0
牝	0	0	1	0	0	0
合計	10	10	66	3	2	10

(表C)

めに犠牲になった家畜の色である。

中国の五行説では、人為的な五色はすなわち、「黒」「白」「赤」「青」「黄」であり、金文の中に最も多く現われるのは「赤」「朱」「玄」「黄」「幽」、甲骨文では「白」「幽」「黒」「赤」「黄」が最も多い。<sup>5)</sup>

以上をまとめると、中国の最古の色彩語は「玄」と「幽」を含んだ「黒」と、「朱」と「赤」、「黄色」、「白色」となる。しかし注意しておかなければならぬことは、卜辞、金文で使われている色は限られているということだ。なぜなら、卜辞に記されているのは、占卜や戦争であり、金文に記されているのは、政や器物、記載者が重要だと思ったことがらだからであって、特殊な状況(家畜を使用するとか下賜品を受けとるといったことなど)でのものだということだ。

#### 4. 色彩語彙と象徴

##### ①黒の象徴

金文の中には「黒」は使用されておらず、「玄」が使われている。これは当時の特殊性が原因しているのであろう。例えば、下賜された品物と

染料技術の関係など。或は厳肅な場合は「玄」や「幽」に代わって「黒」が使われている。『詩經・邶風・北風』に「莫黑匪鳥」(黒きとして鳥に匪ざるは莫し)とある。朱子は『詩經集伝』の注で「鳥や鶲は、黒色。皆不祥の物である。人々はこれを見ることをにくんだ」といっている。これによると古代中国では黒に対して恐らく嫌悪感を持っていたと推測できる。しかしながら、甲骨文の「黒」は重要な色で、しばしば「幽」と同じくらいに現われている。

「黒」と「白」は対立した色であるが、中国人は常に黒を「貶義」(マイナス評価)として用い、白を「褒義」(プラス評価)として用いた。そこから、「善と惡」、「真と偽」などの概念を表わすようになった。いくつか例示してみよう。

「黑白不分」(是非善惡を区別しない。)  
「混淆黑白」(正邪が入り交じっている。)  
しかしながら、「黒」がすべて「貶義」性を持っているかというと必ずしもそうではない。例えば、京劇の「臉譜」(くまどり)では「黒」は「力が強く実直」な人を示しており、項羽や張飛、包拯、李逵はすべて黒いくまどりで登場する。一方、白いくまどりの曹操は奸臣である。現代になると、「黒」と「紅」が常に対になって登場する。「紅」は革命、進歩、激しさを象徴している。一方「黒」の象徴は反革命、後退、頑迷である。この点は、「黒」と「白」は同じで、「白」は政治的には例えば「紅軍」と「白軍」、「紅党」と「白党」と対立し、反革命の側を表わしている。

中国語の語彙が発展していく中で、特に文革期にはおびただしく「黒」のつくことばが造られたが、それは「黒」にかかわると命とりになること、異端者」を象徴している。

黒幫(反動集団)、黒線(反毛沢東集団)、黒店(反対派の集合場所)、黒孩子(戸籍のない闇っ子)、黒五類(地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子)、黒六論(劉少奇の書いた六種類の論文)、黒修養(劉少奇の『共産党员の修養について』という論文)、黒線專政論(文革中、江青一派が新中国成立17年来行ってき

た各種の工作に対して侮蔑したことば)

「凡与“黒”沾上辺的就入了分冊，当了黃種黒人」。<sup>6)</sup> (“黒にちょっとでも染まれば“分冊”に入れられ、黄色人種の中の日影者になっちゃう。)

文革中にできた新語は、社会の変化とともに、死語と化していったが、黒そのものが暗黒を意味しているので、「死、恐怖、陰険さ、暗黒、欺瞞、落胆」などの貶義を象徴していることばに使われている。

黒幫(やくざ)、黒手(汚い手段)、黒市(闇市)、黒心腸(腹黒いやつ)、黒社会(暴力団・マフィアの世界)、黒貨(闇制品)、黑名单(ブラックリスト)、黒話(隠語)、黒吃(ならずもの仲間のさやあて)。

「黒臉」や「紅臉」は、京劇のくまどりのほかにも、日常生活の中で次のように使われている。

「爸爸唱白臉，媽媽唱紅臉。」(お父さんは厳しく、お母さんは優しい。)「紅臉」はほめ役、「白臉」は憎まれ役ということから上ののような意味になる。

「明天開会的時候，你當紅臉，我當白臉啊！」これは、「明日の会議では、あなたは皆さんをたててください。私は厳しく批判しますからね。」という意味になる。

「黒」は動詞として使われることもある。

「他黒了心了。」(彼は陰険で残念になった。)

「他被人黒人。」(彼は“政治的に”陥れられた。)

現代中国語の中では、「青」や「緑」で黒を表現している。いくつか例を挙げてみよう。

「青衣」(黒い服)、「青布鞋」(黒い布製の靴)、「緑雲」(美しい黒髪)、「緑鬚」(黒髪)、「青絲」(黒髪)、「青白眼」(軽蔑した目つき)「青盼」「垂青」(黒い目、親しみをこめた目)はすべて黒い色である。「青驄」は黒毛の馬である。戯曲の中の「旦角」の中の「正旦」は「青衣」ともいう。「青衣」とは黒い布地で作った質素なものである。

現代の話しことばの中でよく使う「不管青紅

「自白」(物のけじめをわきまえない)ということはあるが、これは『元曲』が出典であるのだけれど、この中の「青」とは一体どんな色なのだろう。「自」は黒なので、「青」は黒ではないだろう。それならば、「緑」色なのか「藍」色なのか、どちらとも決め難い。『尚書・禹貢』に「厥土青黎」(その土は青黎なり)とある。その疏は王肅を引いて「青は黒色なり」としている。『詩經・衛風・淇奥』に『緑竹青青』とある。『説文』は「青は東方の色なり」、「緑は帛青黄色なり」としている。

「青」、「藍」、「緑」の三つの色は、互いに区別がつきにくい。「藍青官話」(似て非なる、なまりの多い標準語)や「青出于藍，而青于藍」(青は藍より出でて、藍より青し)ということばもある。いつの時代、どんな所で、どんな場合に、「青」はどんな色として使われているか。これには中国社会、中国文化、民族心理などを深くみきわめていかなければならない。

「青」は基本的な語彙で、数多くの複合語や成語などを作ったり、典故に用いられており、今日でも依然として青で藍や緑や黒を代表させている。「青」は生命力がとても強く、新語の中にもいくつかみられる。現代中国語の中では色としてよりもむしろ「若い、新しい」ことを表わすために使われる。例えば：

「楞頭児青」(世間知らずの愚か者)、「青口白菜」(アオハクサイ)、「青皮」(ごろつき)等がある。

## ②赤の象徴

卜辞、金文を見ると、商周時代の色彩語の中では「赤色」が圧倒的に多い。表Bをみると、計55回であり、「朱色」は30回である。『礼記・檀弓』に、「周人は赤を尚ぶ」とある。「朱色」は「深赤色」で、「朱」は「赤」よりも濃い。『廣雅・釈器』に「朱は赤なり」とある。『正字通』に「赤はもと“炎”を作る」とあり、『説文』に「“炎”は南方の色なり。正色。太陽の色なり」とある。「赤色」は「朱色」よりも浅く、正色でもある。

「赤色」は、金文の中では「市」(ひざかけ)、「袞衣」(天子の礼服)などの繊維製品や「金」や「虎(琥)」などの自然物に使われている。「朱色」は主として「虢(鞶)」(獸皮)などの皮革製品や「黄」、「亢」(上等の玉)などの自然物に使われている。

「可視光線」の波長は7700オングストロームから6220オングストロームまでである。上古漢語では「赤」と称しているが、「赤」はこれらの波長内のさまざまな色彩の総称であって、「紅」も含まれている。『説文』に「紅は帛の赤白色なり」とある。上古漢語の「紅」は現在でいう「粉紅色」(ピンク色)であり、その当時の「紅」は「正色」ではなくて、「間色」<sup>7)</sup>であった。『論語・鄉党』に「紅(粉紅)紫不以為亵服」(紅紫は亵服(平服)を為らばず)とある。漢代になって「紅」は多く用いられるようになり、六世紀末南朝の陳後主叔宝の『紫骝馬二首』「揚塵帰上蘭，紅臉桃花色，客別重羞看」(樂府詩集二十四)に「紅臉桃花色」とあるが、これによると当時の「紅」もやはり「粉紅」であることがわかる。

「紅」が「赤」と交替するのはおそらく八世紀後半であろうと思われる。「赤」と「粉紅」を「紅」と称していた。例えば王維の詩『相思』に「红豆生南国，秋来發幾枝」とあるが、「相思豆」の色は「朱紅，深紅」であるので、本来ならば「赤」か「朱」で表わすべきである。九世紀白居易の『憶江南』(江南好，風景旧曾諳，日出江花紅勝火，春來江水綠如藍，能不憶江南)の詞に「日出江花紅勝火」とある。「紅勝火」というのも「粉紅色」ではないであろう。「粉紅色」は中国ではおごそかな雰囲気に似つかわしくなく、舞台での曹操役の朝廷での服装は「粉紅色」などを使ってはならないし「暗紅，紫紅」もだめである。

「粉紅色」は「桃色」とも称した。女性の顔色を形容するのに常用された。唐詩に「人面桃花相映紅」という句がある。また桃花色は艶やかで落ちやすかったので、「粉紅色」或は「桃色」は「軽薄色情」などの意味をも象徴した。古代では妓女を「粉頭」といった。そのほかに「桃

色事件」(色恋ざた),「桃色新聞」(艶聞),「桃花眼」(色っぽい眼つき),「桃花臉」(美人),「桃花運」(女色の運)などのことばがある。

「紅色」は光明,温かさ,成功,順風などの抽象的な意を象徴している。人々はお祝いをしたり,節句を迎えるときには,常に「紅灯」をかけ、「紅対聯」「紅福字」「紅喜字」を貼り,「紅包」(お祝いの時に赤い紙や袋に包んで相手に与えるお金)を送り,「紅帖」(慶事の際に用いる書状)を送る。好運にめぐり会うときには「走紅運」といい,祝いごとのとき飾りたてることを「満堂紅」,人気者を「紅人」,純益を「紅利」という。

近現代になってからは「紅色」は革命,進歩的,先進的な意味合いを持ち,革命的進歩的なものと関連のあるものに「紅」がついている。

紅衛兵,紅領巾,紅旗单位(先進的な職場),紅色保険箱(政治条件のいい家庭の出身者),紅色政権(革命政権),紅五類(労働者,貧農,下層中農,革命的軍人,革命的幹部)。

最近,時代の変化とともに,時代を反映したことばが生まれている。「紅眼病」はもともと目の病気,急性結膜炎のことであったが,他人が有名になったり金持になったりするのを見て,或は相手の能力などをねたんで嫉妬することを「紅眼病」といっている。

また現代中国語では「紅」のバリエーションとして,「紅彤彤」,'紅通通','紅撲撲','紅凸凸','紅艷艷','紅殷殷','紅潤潤'といった表現がある。

### ③黄の象徴

黄色は,郭沫若『金文叢攷』(東京文求堂,1932)の考えによると,人が玉を帯びている様子をかたどったものであるという。([食],[蓑])。黄色は金文では「赤」や「朱」,「玄」の後に現われている。甲骨文では「白」,「幽」,「黒」,「赤」の後に現われている。従って黄色も基本色の一つであることは間違いない。『説文』に「黄色是地以色列也」とある。「黄」は土地の色であるので「黄地」といういい方もする。漢代に至って陰陽

五行説に「君權神授」の儒学思想が加ってから,黄色に対する解釈にも神秘的な観点と儒学的な観点が加わった。

黄帝が黄の色を尊んだのは「黄者中和之色,自然之性,万世不易」だからである。(『白虎通義』班固),『通典』(杜佑撰)の注に「黄色中和美色,黄承天德,最盛淳美,故以尊色為溢也」とある。黄色は万世不易の大地,自然の色であり,この色は天徳の美つまり「中和」の美であるので,「尊い色」とした。「黄帝」といういい方は,この尊い色で帝の徳をたたえたのである。これは古代では「黄色」の美しさに対する認識が色彩本来が持っている色合いから出ているのではなく,主としてそのシンボリックなところからきているということを表わしている。

中国語の中には帝王の色と密接な関連をもつたことばがいくつかある。

黄屋(古代の帝王がお乗りになった車),黄榜・誉黄(天子の詔書),黄門(漢代に天子を補佐した官職),黄袍(天子の着た衣服),黄袍加身(政権をにぎる),黄道(太陽の移道する道)『元典章』に「庶人不得服赭黄」(庶人は赭黄を服するを得ず)とある。黄色は封建的な社会では法で定められた尊い色であり,崇高さ,尊厳さ,輝しさといった意を象徴している。色で貴賤や階級を表そうとした時,皇帝は黄色を独占したほかに,黄色を用いるとともに,皇帝だけが自分の好みに合わせてこの世のいろいろな色を採用できるという特権をもちえた。そのほかに皇帝は「黄布」「黄紙」を佛教徒,道教徒に下賜して使わせた。佛教や道教で黄色と教義が結びついているのは,黄色には「超世脱俗」の意味があるからであり,黄色を使うことによって濃厚な宗教的雰囲気を出そうとしているのである。だから道士の着る服,香袋,佛教建築,装飾に黄色が使われている。「黄卷青灯」は出家者の生活をいうことばだが,「黄卷」は佛教,道教の經典のことである。

黄色にはまた別の意味,例えば「黄吻」・「黄口」(青二才),「黄口孺子」(経験に乏しい若者)などといった例にみられるように幼さ,あどけ

なさ、可愛さといった意をも象徴している。成熟した穀物は黄色を呈するので、黄色は収穫をも象徴している。「青黄不接」(前年の穀物がなくなり新しい穀物がまだ出ないこと。端境期)「半青半黄」(収穫が悪いこと)。ヨーロッパのキリスト教の社会では黄色い服を着ることは、反逆者を意味した。だから中世では最低な色とみなされていた。中国でも西洋の影響からか「黄色書刊」(わいせつな出版物),「黄色歌曲」などといったことばに「黄色」が使われているが、エロ・グロ、下品さを象徴している。「掃黃」とは「人々の身心をそこなう害のある黄色いごみ(わいせつな出版物、テープ)を掃除する(とり除く)」ことである。後漢末に『黃書』なるものがあったそうだ。いまは散失して存在しないが、性に関する本であったという。

現在の日常の話しことばの中で「黄了」ということばが使われている。「物事がだめになる、計画がだめになる、おじやんになる」意味である。

- (1)再說了，就你們這雜誌辦得這模樣，聯繫多少家也都得黃了啊。(それからね、こういう広告のとり方じゃ、何軒かけずりまわっても、うまくいかないよ。)
- (2)別讓廣告的事兒黃了。<sup>8)</sup> (この広告の件が全部おじやんになってしまわないように。)

#### ④白の象徴

『礼記・檀弓』に「夏后氏は黒を尚ぶ。……殷人は白を尚ぶ。……周人は赤を尚ぶ。」とある。白は甲骨文の資料の中では出現回数が一番多い。これは祭祀のために犠牲にされた家畜の色が白が最も多いかったせいであろうか。

『説文』の白部には11の白を示す語があげてある。最初「白」はおそらく太陽の光の白さであったと思われる。しかし、精白した米粒をかたどったものだとも言われている。一般に「白」を「伯」とし、反対に「帛」の字で「白色」を示した。古代の五行説では、西方は「白虎」で、『刑天、神を殺し』、肅殺の秋をつかさどった。古代では秋に戦うのは不義とされたし、犯罪者

を秋に処刑した。以上のことから、白は死、恐怖、不吉な兆し、反動、悲哀等の意を象徴している。例えば「白色恐怖」(大規模なテロ),「白招子」(処刑される囚人が首にはめた看板)などがある。

中国では伝統的に白を喪服の色とした。『礼記』に「披麻戴孝」ということばがあるが、いわゆる「孝」は「白」である。民間では葬儀のときには、白衣を着、白い帽子をかぶり、白い靴をはき、「素車白馬」(飾りのない車と白馬)に乗った。今日でも人々は白い花をつけ、白い「挽聯」(死者を哀悼する対句)をかけ、白い花輪を送り、死者への尊敬、哀悼の意を示す。葬儀は白と決まっているが、注意しなければならないのは、一般の白ではないということだ。正確にいえば「素服」で、染められていない粗布であって、米色に近く純白色ではない。

古代では庶民は服を飾ることはできなかつたので、庶民のことを「白衣」といい、のちに「布衣」というようになつた。古漢語の中に「白丁」、「白身」、「白屋」ということばがあるが、この中の「白」は「白衣」と関連がある。科挙に合格していない人を「白丁」、「白身」といい、科挙に合格していない読書人の住んでいる部屋を「白屋」といった。「白屋」は茅草(カヤ)ぶきの家である。「白衣」はまた仏門に入っていない俗人をもいうが、これは仏教の僧や尼が「黒衣」を身につけるのに対して「白衣」といったものである。

元明以後、織物産業の発達によって、庶民にも色のついた服を許されたが、それでもきらびやかな色は許されず、生地が制限されていた。

白は「高潔さ、純粹さ、単純さ、素朴さ」といった感覚を象徴している。この種の感覚は成語の中にも反映されている。

一清二白(きわめてはっきりしている。)  
白璧無瑕(完全無欠・純真無垢), 真相大白(真相がすっかりあきらかになる), 一窮二白(一に経済的な貧窮, 二に文化的な空白)など。成語以外にも白を形容することばとして,  
雪白(まっ白), 乳白(クリーム色), 魚肚白

(魚のはらのような白色, 夜明けの空が白むときの形容), 銀白(銀がかった白), 象牙白(象牙のような白色)などがあり,  
また「白」は動詞を修飾する。

白跑一趟(むだ足をふむ), 白講(話してもむだ)白吃(ただ食い)など。

人の色彩感覚は、その人の生活環境と大きな関連があり、文化や生活環境の影響を受けやすい。従って、同じ民族の色彩に対する感覚やイメージ及びこれによって生まれる象徴的な意味合いには共通性がある。もちろん、色彩に対する感覚や意味合いは文化の発展とともに変化するはずだが、特に中国では伝統的に五行と色が対応してから、人々の色彩に対する感覚、感情はこの五行という不变の枠からなかなかぬけだすことが難しく、個人の色彩感覚の發揮をさまたげ、個性の発展を束縛していた。従って、中国人の深層意識の中に色彩語彙の持つ象徴性が深く根づいている。その象徴性が強いために、中国語の色彩語彙を使用することによって行間にあらわれない意識をより効果的に表現することができる。<sup>9)</sup>

従って、外国人が中国の文化や思考様式を理解するためにはこのような色彩語彙の持つ象徴性を理解しなければ、大きなずれが生じる。これは何も色彩語彙に限ったことではないだろう。今後、動物、植物、身振り、ことわざ、衣装、風景などにまつわることば、民族性、イメージなどをめぐって考察して行きたい。

### 注

- 1) 李宗桂『中国文化概論』(四川人民出版社, 1986) p. 304
- 2) 許慎撰『説文解字』(中華書局影印, 1979)
- 3) 〈注〉1)。p.7に「白商は或は素秋, 素商とも称す。素は白色である。商音を秋に配した。ゆえに、また素商, 白商とも称す。」とある。
- 4) 遠藤雅裕「古代中国語の色彩語彙」(『中国語学』241号, 1994) 所収, p.126
- 5) 「戦」についてはここでは触れない。この字については、諸説があり、確定が難しい。
- 6) 古華『芙蓉鎮』

- 7) 古代には正色と間色の二つがあった。青、赤、黄、白、黒の五色が正色で、緑、紅、碧、紫、鰐黃(流黃)の五色が間色であった。『説文』に「緑は青黃なり、紅は赤白なり、碧は白青なり、紫は黒赤なり、鰐黃は黄黒なり」とある。間色とは二色がまざってできた色のことである。
  - 8) 王朔『編輯部的故事(台本)』第二集(誰主沉浮, 下)
  - 9) 1980年代~90年代の小説の題名に色彩語を冠したものが散見する。そのうちのいくつかを挙げておく。  
1981, 史鉄生「緑色的夢」, 蔣子龍「赤燈黃綠青藍紫」  
1982, 張承志「黒駿馬」  
1984, 金河「白色的誘惑」, 張潔「祖母緑」  
1985, 莫言「透明的紅蘿蔔」  
1986, 葉兆言「緑色的陷阱」, 「緑河」, 「緑色的咖啡館」, 「懸掛の緑苹果」, 劉西鴻「黒森林」, 格非「青黃」, 劉心武「藍夜叉」, 李佩甫「紅螞蚱緑螞蚱」  
1988, 劉心武「白牙」  
1990, 張宇「紅帽子緑帽子」  
1992, 劉恒「黒の雪」  
1993, 周大新「左朱雀右白虎」, 方方「黑洞」  
1995, 賈平凹「白夜」
- 葉兆言という作家に「緑」を使ったタイトルが目につくが、これらは作品論、作家論の中でとりあげて行くつもりである。

### 参考文献

- 常敬宇「漢語象徴詞語的文化含義」(『語言教學與研究』1992, 4)  
劉雲泉「色彩, 色彩詞與社會文化心理」(『語言・社會・文化』語文出版社, 1991)  
宋元培・端木黎明『中國文化語言學辭典』(四川人民出版社, 1993)  
陳建民『語言文化社會新探』(上海教育出版社, 1989)  
郭錦桴『漢語與中國傳統文化』(中國人民大學出版社, 1993)  
劉錫誠・王文宝主編『中國象徴辭典』(天津教育出版社, 1991)  
上村六郎『日本の色彩』(河原書店, 1965)  
大岡信編『日本の色』(朝日新聞社, 1976)  
吉野裕子「色彩と陰陽五行 および日本の古代呪術」(『is 総特集, 色, ポーラ文化研究所, 1979) 所収  
白川静「天地玄黃 古代中国人の色相観」(同上所収)  
中野美代子「青い鳥 中国民話の古層」(同上所収)  
興水優『中国語基本語ノート』(大修館書店, 1980)  
王敏『中国人の“超”歴史発想 <食・職・色> 五千年の研究』(東洋經濟新報社, 1995) 第三章, 色の「遊楽」

丘学強『妙語方言（その二）』（翻訳、千島英一）第5章  
方言と数字、方位、色彩（麗澤大学紀要第59巻1994）の  
色彩の項。